

南総里見八犬伝

九

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八大伝 (全一〇冊)

一九八五年七月一五日 第一刷発行 ©

定価二八〇〇円

校訂者 小池 藤五郎

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・六五・四二二
振替 東京六二六二四〇

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-004319-6

解 説

予今朝より八犬伝九輯巻の巻、本文九十三回のはじめ二十二丁目、壺丁稿^レ之。筆洩り候に付、終日にして、僅に壺丁稿^レ之（天保五年三月六日の『日記』）。

一日かかつて僅かに壺丁（原本二頁）の原稿が書かれたのであった。文政九年（六十歳）の秋には、一日に六丁を起稿し、天保五年（六十八歳）の春には、多い日で四丁となっている。そして六十歳頃の馬琴は大抵夜は十時に創作の筆を擱^おき、病氣などの事故の時は、夜間の著述だけは休んだ。こうした事実を考えると、龐大の作品も、日々の努力を積んだ結果であることが知られる。趣向に終日を費しても妙想は浮かばず、筆は渋滞して一字も書けずに過ぎた日もある。暑中も寒中も、元日も盆も、家庭のいざこざや病氣や不幸や疲労などを克服して、歩みつづける作者馬琴の姿は、痛ましくもまた尊いものであった。犬坂毛野^{いぬさかげの}が対牛楼^{たいぎゅうろう}で父の讐を討つ場面の第六輯巻之四は、文政十年正月元日の昼時^{ひるどき}から午後八時までかかつて、初度の校合二十六丁を終えたものであった。

馬琴は文字にやかましかった。独得の作字は最も注意すべきものであり、本書はそれを保存することに特に努力している。彼が、原稿中に正しく書いた文字も、しばしば筆耕が誤写した。そ

うした点が目につく限り、一字一画も^{ゆるがせ}忽諸にせず、自身や家人がわざわざ出向いて訂正した。天保五年十一月二十四日、『八犬伝』第九輯自序の「在昔」の熟語に疑問を懷き、二十四日・二十五日と諸書を穿鑿^{せんさく}した後、漸く『助字鴿』^{じよじこく}でそれを発見して安心したというような話は、別に珍しいことではなかった。

第八輯卷之三に諏訪湖畔を馬上の旅人が煙管^{きせる}を手にして行く様を、柳川重信が画^かいたが、馬琴は戦国時代に煙管がふさわしくないとし、扇子に持ちかえさせ、結局旅人の顔を湖の方に振向けて笠でかくすが如き不手際をも忍んでいる。馬琴が画^えく挿絵の下絵^{したえ}中に、画^かかれていない物を画工が画き添えることもたびたびあった。第九輯卷之十五の土丈二・嗚呼善^{おこせ}が次団太^{じだんだ}に殺される場面で、猛雨^{にわかあめ}が降って来たと本文にあるのを見た画工の重信は、氣を利^きかせて傘と下駄を画き加えたが、馬琴は喜ばず、傘を張り消して絵の繋ぎ^{つな}を付け、彫刻^{ていこく}させたところ、下駄がなお除いてなかったため、結局彫り直させた。第九輯卷之二十三の足利義尚^{あしひさ}の顔を、馬琴は注文書^{ちゆうもんがき}に十六、七歳と記したが、重信は四、五十歳とした故、馬琴は怒って画き替えさせた。視力の全くなかった、天保十一年頃、なお手さぐりで下絵を画きつづけた。勘^{かん}で書くため、頭が二つある人物、腕が頭についている人、襟や胸に目鼻のある者、腹から手が出ている男など、百鬼夜行図^{ひやくきやぎょうず}さながらであった。画工が馬琴の下絵によって苦心して画いた挿絵は、薄美濃^{うすみの}へ毛のような細い線^かで画いてあり、到底見えるはずはないが、それさえ手にとり、家人に見せて細部にわたって説明させ、漸く納得

するといふ行き方であつた。

こうした緻密な作家の挿絵を引き受けた画工は、氣を利かせれば蛇足と言われ、注文書のままでは働^{はたら}がないと罵られ、作者自身が盲目であるだけに、その画^かきにくさも一入^{ひと}であつたろう。重信は馬琴にしばしば罵倒されたらしく、また天保九年六月、伊勢国松阪の殿村篠斎に宛てた書翰には、

画も重信は多病且不実等閑の本性にて出来かね候間、半分は英泉に画せ候

と批評されている。葛飾北斎は、初め馬琴の作品に画^かいたが、後には全く画がなくなった。凝り性で自信が強く覇氣に富んだ北斎は、馬琴の小うるさい注文や要求に従わず、画家として自分の絵として画いた。馬琴の下絵に右方に置かれた人物を、絵の具合によって、勝手に左に画いた北斎には、さすがの馬琴も手を焼き、北斎に画かせる場合には、人物を是非とも右方に画かせようとする時には、下絵では逆に左方に画いて置けば希望した絵が出来ることがわかり、そんな方法をもとめた。挿絵については馬琴と北斎とは幾度も衝突し、結局北斎は意地になつたらしく、遂には馬琴・北斎絶交説などまでも伝えられている。

『八犬伝』は初代柳川重信が肇^{じようしゅ}輯から挿絵を担当していた。第五輯あたりから溪斎英泉が助力し始め、第七輯は特に溪斎英泉・柳川重信が画き、第八輯は表面上初代柳川重信筆となつてゐるが、実は二代柳川重信筆と見える。初代重信は天保三年に歿し、第九輯からは二代柳川重信が担

当し、英泉がしばしば補助し、歌川貞秀も僅かに助力した。馬琴は自己の下絵の要求通りに少しも違わず画くは、

北尾並に豊国今之国貞のみ

と記す。しかし重信なればこそ、大して喧嘩もせずに挿絵を完成した。この挿絵が、『八犬伝』の大喝采を博した一因であることを思う時、特に初代・二代の柳川重信の功績を認めるべきであろう。

挿絵の人物の顔は、かしらほりと呼ぶ彫師中の良工の手で彫られるものである。かしらほりの名工米助が書肆角丸屋甚助に前借金があることを知らず書肆鶴屋喜右衛門に紹介し、自作の挿絵を彫らせた馬琴は、甚助に訴えられ、とんだ迷惑を蒙った。『墨田川梅柳新書』馬琴作読本、文化四年刊)を彫らせた時は、朝早くから日暮まで米助の家に坐り込み、米助が外出を装って二階に隠れ、他店の仕事をしていると、胡乱に思った馬琴は、米助の妻の止めるも聞かず二階に踏み込み、自作の読本の挿絵を彫らせ、このように二十日間つづけて挿絵を完成せしめたことなどもあった。馬琴は潤筆料(原稿料)を前金で受け取った以上は、原稿の期日を違えなかった。文化頃には日夜編述の筆を駐めず、夜半からは読書をなし、暁に至らなくては睡らないことが幾年も続いたため、仰臥すると家の中が走馬燈のように廻り、あるいは反覆する如くに感じ、横に寝なくては睡れなかった。

夕七時頃丁子屋平兵衛来る。予対面。八犬伝潤筆料として金拾両持参、則請取畢。右の内三両は九輯潤筆二十四両分残り皆済。又、七両は十輯潤筆の内金也

（天保五年五月二十一日の『日記』）

これにより、一輯五、六冊で馬琴は二十四、五両の潤筆料を得ていた如くに学者は解釈して来たが、既に八輯が上帙下帙に分れて、合計十冊であり、九輯もその程度の予定のもとに丁子屋から二十四両を前金に支払われたものかと吾人は解釈している。それ以外は第十輯分としての内金である。したがって『八犬伝』の原稿料は、一帙五冊当り十二両（普通の作者は五両程度）見当と吾人は見ている。合巻ごうかんの如きは『新編金瓶梅』（馬琴ごうかん合巻、自天保二年至弘化四年刊）の第三編（八冊）が前金で五両であった。こうした潤筆料のほかに、新刊売出しの節は、当時の定法じようほうとして製本二部に金百疋を添えて出版書肆から贈られていた。結局、馬琴の潤筆料は当時の最高額であったらしい。

（昭和十六年三月）

凡 例

一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って嚴重に行った。

一、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。

(1) 本文に段落を設け、詞には鉤(一)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。

(2) 冒頭の漢文の序の繋符(一)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。

(3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。

(4) 原本の文章はすべて句点(。)で切つてあるが、それを読点(、)・句点(。))に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。

(5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平等」を「城兵等」に、「聡察叡智」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。

(6) 原本の仮名づかいは「亡父」・「滅亡」・「亀篠」・「亀篠」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振つて置いた。

(7) 馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「歟」その他を仮名書にした。「漁夫」の如き場合には左側の片仮名のみを削った。
ぎょふ
リヤウシ

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻(小池藤五郎校訂、昭和十二・十六年刊)を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』(架蔵番号別三―一〇六一二)と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている異体字のうち、逃・羣・晋・晋など、いくつかを通行の漢字(逃・群・腰・胸)に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の()は原本の割注を示しているが、今回これを〔 〕に改めた。原本の欄外注は「 』に収めた。

一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

(岩波文庫編集部)

話の筋(第九巻の分)

〔第九輯〕(卷之三十三より卷之四十五まで)

古小袖に朱鞆の刀、眉目秀麗、堂々たる売卜者の赤岩百中は、武蔵国柴浜高瀬の浦で、関東の両管領扇谷定正・山内顕定に乞われ、里見攻撃の吉凶を占った。この浪人こそは間諜姿の犬村大角であった。両管領は谷山に風外道人(大)を訪れ、その術中に陥り、西北の風に乗じて、文明十五年十二月八日に、里見家の水軍を焼き討ちする計画を立てた。

軍師大阪毛野の謀略は神の如く、かつて素藤に味方して里見に捕えられていた千代丸豊俊を、佯って管領方に内応させ、勇婦の音音、その嫁の曳手・単節らを女間諜として扇谷方へ入り込ませた。

行徳方面を固めた満呂重時は満呂再太郎・安西景重の二青年と協力し、人魚の油の奇効によって敵が仕掛けた水中の鉄鎖を切断し、莊介・小文吾の軍をして思うまま連合軍を破らせた。莊介は敵を追って稲戸由充と対陣したが、由充の旧恩を感謝して三舎を避けた。武蔵国千束の野武士の頭上水和四郎束三は四、五十斤の鉄棒、赤熊如牛太猛勢は大鉞を振って小文吾に立ち向い、三つ巴になり、息づまる激闘の後、両豪傑は斃され、遂に小文吾・莊介の率いる六、七千の軍勢は、

扇谷朝良・千葉介自胤らの二万五千の大軍を突崩した。かくて十二月八日の海陸の大戦闘が物凄くも展開され、自胤・朝良・大石憲重らはこの方面で捕虜となった。

国府台方面へは、山内顯定・足利成氏の三万五、六千の兵が十二月六日に押し寄せ、戦車をもつて里見方を窮地に陥れたが、現八は、戦車隊長の斎藤盛実を捕え、また、長阪橋の上に単騎で駐り、成氏らを一喝し雲霞の大軍を潰走させた。管領方は、新鋭の兵器の戦車百数十乗を先立てて信乃・道節の軍に猛襲して来た。里見方は、戦車の攻撃に悩んだが、八日の払暁に野猪の牙に松明を結んで敵にけしかけて戦車を焼き、続いて里見義道と長尾景春の戦となり、里見方の危い折り、京都から帰途の大江親兵衛が、連枷を武器として奇怪な一隊を率いて来合わせ、長尾の軍を散々に破った。山内憲房・足利成氏は捕虜、横堀在村は信乃に射殺された。

国府台城に禁錮中の成氏を訪れたのは信乃・現八である。信乃は成氏に向かって、かつて父の遺言により献上した村雨丸が、悪人にすりかえられていたため間諜と疑われ、芳流閣上で現八と血戦した苦衷を語ったが、それを聞く成氏は、額に汗して恥じ入るのみであった。

扇谷定正とその子朝寧は、水軍を率いて進み、女間諜の音音は仁田山晋六の火薬船に乗り、曳手・単節等の女性は、里見家のために人質となって五十子の城内に拘禁されていた。音音は晋六を討ち、その兄にかつて二人の息子が討たれた怨みを晴らし、船の火薬を爆発させて海中に飛び込んだ。

大角は三浦義武と海上で戦い、義武を擒とりこにした上、新井城あらいを乗っ取った。定正の水軍は、八日の朝に安房国洲崎すきを襲い、里見義成の水軍と戦って逆に火攻めにあい、道節は逃げ行く朝寧ともやすを海に射落おとした。鎌倉も遂に里見の占領するところとなり、堀内雑魚太郎ざこたろうが陣營を置いた。

海上の戦に敗れた定正は、五十子いさちこの城に退く途中、道節に追撃され、従う者は一人もなく、絶体絶命の時、忽焉こつえんとして現れたは道灌どうかんの倅せがれ——巨田薪六郎助友おおたしんくろすけともの一隊であった。

主要人物一覧(第九巻の分)

○信乃・莊介・現八・道節・小文吾・毛野・大角・親兵衛 八大士。

扇谷定正・山内顯定・足利成氏(許我成氏)・千葉介自胤・上杉朝寧・上杉朝良・上杉憲房

定正・顯定は兩管領。顯定・成氏・憲房は国府台方面、定正・朝寧は水軍、朝良・自胤は行徳方面の連合軍の大將。

大石石見守憲重

定正の重臣。大塚の城主。かつて莊介を処刑しようとした。行徳口の戦で莊介に捕えられた。

小幡木工頭東良

定正の重臣。洲崎沖の海戦で捕えられ、恥じて自殺した。

赤岩百中 風外道人

百中は大角、風外は、大法師。大角は売卜者、大はその師匠、という風に

樋引 臥間 戸山 叫子

こしらえ、定正・顯定を欺いた。間諜となった音音・曳手・妙真・單節らのそれぞれの仮名。いずれも千

千代丸豊俊 武田信隆

かつて素藤に味方した人物であるが、豊俊は間諜の役目をなし、信隆は内応

の色を見せた。

朝時技太郎

天岩餅九郎

大石憲重の間諜。技太郎は里見義成の仁心に感じ、餅九郎は反間の策に

引つかかった。

浜島馬助

里見の臣浦安友勝の仮名。里見家に捕われていた千代丸豊俊の臣と詐り、間諜となつて働いた。

仁田山晋六武佐

大石憲重の臣。火薬船の長として音音を伴つたが、酒に酔い音音に殺された。

館持儼仗朝経

朝経は上総の市原、俊故は夷瀟の郷士。里見の軍に従い行徳方面で戦つた。

満呂再太郎信重

再太郎は麻呂信俊の子孫。木瓜八は下総行徳在の鍛冶

で、再太郎を育てた。就介は安西出来介の子。再太郎・就介は里見に属し、行徳

口の戦で手柄を立てた。

上水和四郎束三

赤熊如牛太猛勢 野武士。行徳口の戦で小文吾に討たれた。

万戸月十字七行益

宿尻城戸介建隆 上杉朝良の臣。行徳口の戦で莊介に破られた。

斎藤兵衛太郎盛実

山内顕定の臣。斎藤高実の子。駢馬三連車という戦車隊の長。現八に生捕られた。

田税力助逸友

里見の臣。国府台口の戦で文明の岡に陣し、信乃の計画に従い国府台の城に使い

して猪六十五頭を得て帰つた。

真間井縦二郎秋季

繼橋綿四郎喬梁 潤鷲手古内美容 振照俱教二弘経 里見の臣。国府台方

面で奮戦した。

二四の寄舎五郎

須々利増五郎 野武士の頭。親兵衛の胆勇に伏し里見の臣となつた。

水禽隼四郎緑林

錦帆八四九郎近範 南海の海賊の頭領。定正の水軍の先鋒。

三浦暴二郎義武

相模新井の城主三浦義同の子。大角と海上で戦い、捕えられた。

草占八郎くさうらほちろう

勇無頭九郎いさみむずくろう

里見方とまやのはちろう八郎景能かげよしと田税戸たちからと賀九郎逸時がくろうはやときの仮名。大角が新井城を攻めた時、二人して城主義同を捕えた。

目 次

解 説

凡例・編集付記

話の筋(第九巻の分)

主要人物一覧(第九巻の分)

南総里見八犬伝(九)

南総里見八犬伝 第九輯巻之三十三簡端附録作者総自評

南総里見八犬伝 第九輯下帙之下乙号中套編目録

自評余論

第九輯巻之三十三

第一百五十四回

ひやくちうばいぼく
百中売卜両将を倡ふ
ふうぐわいふうじゆつそんじ
風外風術巽二を招く